

2022年度GTセミナー 第56回保育環境セミナー 人的環境編①

第303号 2022年12月19日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

人的環境編①

2022年12月12日～14日に「第56回保育環境セミナー」
(人的環境編)を開催しました。

オフライン参加は約100名、オンライン参加は60施設を超える
お申し込みを頂きました。今回は、藤森代表から「人的環境」につ
いて考え方をお示し頂きました。

本誌含め、4回に分けて人的環境編をお送りする予定です。

【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイをさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機(欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれない「ひと」が少し先にいるとか)を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場(空間)が関わってくるのです。そのために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関われるように、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。

今年環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司(新宿せいが子ども園 園長)



2022 第56回
保育環境
セミナー

今、子どもに必要な
保育の「考え方」と
「環境」を学ぶ。

空間的環境編	物的環境編	人的環境編
7/4、5、6	9/5、6、7	12/12、13、14
くうかん	もの	ひと

保育環境セミナーは全編3日間の日程です

1日 総見学 + 2日 講演・実証発表 + 3日 総見学

第 56 回保育環境セミナー 基調講演（人的環境編）

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

目次

—はじめに—

—GT 長崎勉強会①—

—「参画」の意味—

—GT 長崎勉強会②—

—GT 長崎勉強会③—

—人類の進化から考える—

—これからの時代を見据えて—

—藤森メソッド 4つの提案—

—はじめに—

皆さんおはようございます。やっとライブでこういう会が開かれるようになっていますが、コロナがどのくらいものかの議論されていて、明和先生が新書でマスクが良くないことが書かれているが、そういう研究が随分出ている。ドイツでもはっきり出ていて、私も言っていたが、表情は目で十分伝わるといことが出ていたが、明和先生が言うように、目では伝わらない。私としてショックだったのが、うちに園見学に来られた方は、立て看板が残っていたと思う。お楽しみ会がありました。私の園では、お楽しみ会、運動会、成長展をすべて成長展に変えて、それぞれの成長を保護者に観てもらふことと、この間勉強会の中で行ったが、保育園の役割として私はつい忘れがちなのが、園に来ることが楽しいとか、楽しさの中に自ら成長を感じさせる役割があると思っています。それをどうも忘れていて、子どもは出来るようになるとか、成長する喜びを保護者と共有するために行事があることを保護者に伝えた。最近成長や発達を伝えると面白くなさそうだという園があつて、それはおかしくて、毎日好き嫌いのことも考えるが、残食をなくすことだけを考えるなら、毎日ラーメンや寿司を出せばいい。そうではなく、いろいろな食材を味わってもらふ、感じてもらう役割なら、残すこともそれほど恐れないで、いろいろなことを体験させることも必要で、ただ子どもが好きだけではなくて、どんなことが子どもたちの成長に必要なかを考えないといけない時に、自ら成長していく、知っていく、出来るようになることが喜びになるような子にしていくことも大事だと思っています、何も保護者に発達を見せるだけではなく、子どもが見せることを喜びとするような保育をしないといけない。お楽しみ会も劇とかでは練習をする。その練習の中で、できるようになることがうれしい、見せたいくなる。

—GT 長崎勉強会①—

私たちの GT 園の中で、各地で GT 勉強会がある。今度 2 月の初めに長崎勉強会がある。年 3 回あつて、4 月は理論武装会でリーダーが集まって理論を勉強しよう。どんなエビデンスがあるかを管理職として必要なことです。その裏にどんな研究があつて、時代背景があつて、そのためにどんな保育が必要かを考えないといけない。そして 2 回目が夏、実践発表の会です。エビデンスに沿った実践を各園が発表し合う。7 園くらいある。私としてはとても感動す

る。保育団体があってもそこでも実践発表を聞くが、まず半分以上はその園の背景、定員やどの地域で設立かの話。その前提はあるかもしれないが、実践発表は何を目指しているかがない。特殊な例を出しても、森に行き散策をしていますといっても、東京の園では真似は出来ない。そのもとにある理念であればいいが、参考にならない。GT長崎の実践発表は一つずつに感動します。理論武装の時にどんな考えをして、どんな保育かを提案する。今日は話ませんが、子ども主体の保育が言われる。誰でも子ども主体の保育は言われるがです。どういう場面で、どう実現していくことが、実現していくことなのかを考えないといけない。その中で考えたのが、子ども基本法が出来て、元の権利条約を日本は批准した国として法令になったのが、子ども基本法ですね。いろいろなところに子ども基本法が出されているが、基本的には、権利条約です。人には権利がある、これが人権です。そしてその中で特別な権利、子どもは特別なものがあるというのが、子どもの権利条約です。それはそうです、というのが承認です。そして承認だけではなく、具体的に自分の国の法律に全て最高位に子ども権利条約を持ってきて、それによって変える。実際にやっていますと表明が批准です。日本はかなり昔に批准していますが、しかし法律が変わっていないです。日本の子どもに関する教育基本法等、権利条約などを批准したのに何も変化がない。今回子ども庁が出来るにあたって、批准したのだから法律を作りましょうと作ったのが、子ども基本法です。なので元々は子ども権利条約です。世界中が批准をした中で、日本は最後だけ法律を替えました。唯一残っているのがアメリカです。アメリカは承認だけで批准していません。格差が大きい国なので、まだ承認だけです。子どもの権利条約の中に4つの権利が書かれています。子どもとして大事にされる権利などがあるが、最後に子どもが参加する権利が書かれています。

— 「参画」の意味 —

これは実は私はその日本語訳が間違っているのではないかと思うが、いろいろな決め事に子どもが加わることで、と説明が書かれているが、その場合は参加ではなく、参画する権利があるというのが正確に言うことです。まずドイツに毎年行っていました。ドイツでは、子どもの権利条約を批准したときに現場がどう具体化するかを教育関係の人が、幼児教育の学者、行政などが集まって、権利条約を具体化する方法を検討した結果、参画をテーマにしました。ドイツで言われた。大人が決めたことに加わることは参加。それと違って、決めること自体に子どもが加わるのが参画と区別していました。最初に始めたのが給食で、日本では給食は、食を給うと書く。上のものから、下の者に与え、そこに子どもが参加して、食べることを見直して、子どもがどこで、何を、どこで食べるかを決める権利を持たせようと始めたと言っていました。私が提案したセミバイキング方式です。何を、中々種類は選べないが、子どもが量を選べたり、誰と、どこで食べるかを子どもが決める。ちょうどドイツへ行ったときの参画の例が、遠足。どこに行こうかといったときに、代表が出て候補を出します。海がいい、山がいいを出したら、その写真と場所、コメントを踊り場に貼ってありました。その階段を通るたびに、シールを行きたい方に貼る。そうすると多数が決まります。大多数が山がいいとします。その時に当然、民主主義の考え方なので、山が多いので、山にしましょうと決めません。それは民主主義ではありません。そうではなく、少数の意見をどう取り入れるか。海がいいという人たちが、何でいいかの理由を聞く。水と触れ合えることが大切という意見が出たとしたら、両方の最適解。お互いが合意する考えを見つけ出していくのが難しいことです。昔のダイバーシティの次に来ることです。これもいい、あれもいいというのがダイバーシティ多様性です。ただ多様性だけでは、物事は決まりません。一つに決めていけないといけない。その決めていく力が、大事だと言われています。違う考え方であっても、お互いが納得するように、水がいいなら、川のある山に行くということを決める。この積み重ねが参画と言っていました。夕涼み会の一つの場所は、子どもたちが企画するとか、参画のテーマに話すとも長くなるが、参画の梯子と言って、参画のランクがあります。

下のランクは、ほとんど日本がやっているランクです。子どもを誘導して、子どもがいかにも決めたように見せる。これを見せかけ参画という、メッセージを書いたTシャツを子どもに着せて、大声で叫ばせるのも参画に見えるが、大人がさせているに過ぎない。本当の中身を理解すること。100パーセント子どもに任せるわけではないです。何をするかを理解させることです。世界中で参画が起きています。そうすると、与えられたものをその通りやるのではなくて、子どもが内容に立ち入ることができるとしたら、私がずっと考えてきた保育の中で見直した一つが給食。給食を考えた時に、子どもがどれくらい、何を、誰と食べるかを選んでいる。もしかしたら、一つではなくて、子どもに選択をさせる。例えば、外に行くか、部屋の中にいるか。何かをするときに、どちらにするかは参画ではないかと思ったので、まず入り口として私が提案する保育の一つ、子ども主体の保育。それは子どもに参画させること。参画の具体例が、いろいろなものを選択させえること。子どもにどちらにするがある。ただ、その中で許容できる部分があるので、大人が選択肢を用意するが、どちらにきなさいと大人が決めない。保育の中にすべて選択させている。そうするともう一つ、OECDが大事だと言われている力が、責任を取る力。その一つです。うちでもそこまでと思わなかったが、こういうことがありました。先生たちはあまり意識していなかったが、1歳児が午前中のおやつで、じゃむつきのパンを残す子が多かった。ある先生が、ジャムのせいかもしれないからと、調理にジャムをついていないものを出してと言った。1歳児の子に選ばせた。そうしたらびっくりした。1歳は即座に指をさします。子どもは、こっちと差します。意外とついていない方を取るが、私が見ていた時に、ついていないパンが先に無くなった。ジャムのついていないのしかなかった。その時に新人の若い職員が1歳にいた時に、どっちと選んでもらっていたが、ついていないものしかなかったが考えた。その結果、子どもに二つ出して、こっちにする？そっちにする？と、一瞬子どもも、どっちもついているじゃんという顔したが、聞かれたから、こっちと答えたら食べていた。普段は残すけど、自分で選んだら責任を取ろうとするのだと思った。選択することは、参画の意味もそうですね。参画をしたら、自分で責任を取る。例えば、お昼寝をするか、寝ないで静かに過ごすか。寝ない子は、静かにというのがついているので、その責任を取るために静かに過ごす。寝ている子と同じくらい的人数で済む。走られたりしたら困る。選択肢の選び方によって違うが、選んだ方の責任を取ろうとする。子どもの権利条約から含め、選択すること。見守るだけだとスタンスだけを考えてしまい、そうではない部分も提案しているのが、子ども主体の保育は、選択をさせることを保育に取り入れることです。

—GT 長崎勉強会②—

もとに話が戻るが、長崎の理論武装の時には私がどう考え方を話したら、夏の実践発表である園が、選択は積み重ねだから0歳から選択をさせている。手形を押します。何色にするかを0の子に選ばせる。それから絵本を読むときは、乗り物と動物どっちがいいと選ばせる。1歳では、何を選ばせて自分の意志で言わせると選択する効果を私がまとめた。年長になると、夕涼み会のブースなどの出し物を自分たちで話し合っ決めていくことができるという実践発表を聞き感動した。積み重ねて選択させると、自分の意志で考えて言うようになり、責任を取ろうとする。私保連の通信に、佐久でイエナプラン小学校が出来て、その副校長先生がインタビューに参加する中で特徴について、「私たちの学校は、いろいろなものを選択させています」と書いてあった。それを読んだ時に、私たちは0から選択させていると思った。実践発表を同じテーマで発表すると面白い。これは全国の人に聞かせたいと思って企画したのが、今度全国大会が鹿児島で行われます。それは実践発表の会です。各地から実践発表をしてもらいます。ベースが同じなので参考になる。今年鹿児島でやるので時間が取れば是非、2月の建国記念の日です。土曜日の日が全国大会になっています。次の日は日曜日なので、観光して帰るとか、金曜日の午後私が話をしたが、そこに記念講演をします。

私たちは一つの考え方があるので、鹿児島には、郷中教育という江戸時代の教育方法があります。先生がいなくて、子ども同士の教え合い、上の子が下の子を見る。異年齢集団の学びあいで、小さい村なのにその中から、西郷隆盛や大久保利通とか有名な人、明治維新を起こした人たちが郷中教育を受けた人が多い。その郷中教育の研究者に話してもらおうというのが記念講演です。同じ考え方でやっていくと、コピーで同じではないので、理念が同じなので議論がしやすいとか、今、全国大会の企画をしています。

—GT 長崎勉強会③—

遠回りで戻ってくるが、3回目が公開保育です。2園地域を決めて、公開保育を交代します。午後に私の講演があります。公開保育を長崎はしたい園が多い。見せたい園が多いです。とくに見守る保育をはじめた園は、いろいろやりますので見せたくなる。そういうように、出来ることを見せたくなる。これがお楽しみ会や行事の一つだと思っています。子どもたちが成長の喜びを感じ、見せたくなる。お楽しみ会も成長展に変えて、学芸会のようなものは、表現と言葉の表現領域を子どもの喜びを感じ、見せたくなる。保護者と一緒に成長の喜びを感じてもらうことをした。最初に戻るが、0歳児が普段、椅子に座って絵本の読み聞かせや、手遊びをした先生はマスクをしていると、子どもたちは全く無表情です。表現と言葉の表現が全く発達していない。なぜかというと、マスクをしマイクを使っていると、誰が話しているか分かりません。口が動いていないので、子どもはきよるきよるしているだけで、口元が見えないので無表情です。これは2歳まで基本的にそうです。2歳まで3年間全てマスクの顔しか見ないで、ずっと過ごしている。これでいいはずがない。仕方がないが、だからと言って、コロナが心配と言っても、一生に関わる表現と言語が消えてしまうのではないかと心配した。それを見て保護者に成長展、お楽しみ会の前に私が宣言しました。飛沫感染は2メートル以上離すと起きないと言われているので、2メートル以上離す時は、マスクを外させてください。近づくときはします。離れているとき、声を出さない時は、出来るだけ表情を見せるようにします、と先生が読み聞かせをしているときは、マスクを外して名前を呼んだ。人は長い進化の中でどうやって生きてきたか。お互いが伝えあってきたかですね。どんな風にして、いわゆる社会の中の人として、生きていくかがあると思う。社会の中で生きていく生き物は、社会の中で生きていく生き物なので、社会の中で学んでいかなければいけないが、家の中にいる、ということが起きてきている。いったいどこで社会を学んだらいいのか。環境の中の大事な人が、今回のコロナで欠けてしまっている。マスクは誰の、何のために先生がするのか。移さないためなら問題ですね。雇っている人が来てしまっていることですよ。マスクをしているかの問題ではないです。かかっている人が来るのはもってのほかです。ちょっとでも体調が悪いなら、医者に行って診てもらおうとしても、休まないといけな。そのための加配が少なすぎる。私は、子どもを見るための加配はそんなにいらんと思っているが、安心して休めるくらいの人には必要だと思います。だからクラスターが起きてしまう。安心して休める余裕がないとだめです。そういう意味の加配は欲しいです。内はやりくりをして休む、ちょっとでも体調悪いのに出てくると、猛烈に怒られます。移さないためというのは、あり得ないです。自分が移らないため、子どもから移らないためもあるが、自分を守るために、子どもを犠牲にしていいのかがある。本来、保育者は外した方がいいと思うが、もう一つは違う移り方です。飛沫感染はあまり移らないが、国のガイドラインは、ノブを拭いたりはいらないと言われています。RSや食中毒については、拭かないといけませんが、コロナに関しては拭くことは意味ないと言っていますし、レストランやホテルで手袋をしても、意味がないと言っています。飛沫感染もあまり意味がないと、黙食は今はやらなくていいと、アメリカで研究をされていて、アクリル板は意味がないと出ています。問題は、エアロゾル感染です。あれがクラスターの原因です。飛沫でも接触でもなく、空気中に漂ってしまう。その場合はマスクというより喚起をしないといけなないので、一番危険なのは

雨の日の冬です。先生たちは雨が入るとか、寒いとかで開けたがらない。ただコロナはダメです。マスク以上に気を付けないとだめですね。家で家族が出たと言って、隔離してもダメですね。エアロゾル感染があったら。現在何がいけないかが分かって来ていますからね。

—人類の進化から考える—

そういうことを考えると、人類から考えて、どういうことをして、進化してきたのかを考えた時に、これを現場の中で私は保育に移す。誰もが言っていることで、大事なことはあるが、私としての特徴のある主張があります。それに特化して、賛同するということになるが、人との環境だが、その中で大きな衝撃が走ったことがありました。それは、乳児保育の考え方です。乳児保育の人との考え方です。常々思ってきたことが、アメリカのハリスがはっきり言ったことだが、社会の中で、集団の中で生きてきた生き物が、単体の研究は当てはまらないことが多いということです。今、保育の基本になっている心理学は、単体の子どもの研究か母子の研究なんです。しかし、それは集団の中では当てはまらないということです。違う要素が集団の中で出てくる。例えば、マシュマロテスト言う実験があって、4歳の子にした実験で、15分食べないで待たせたらもう一つあげる。食べなくなったら、食べていいよと言って食べてしまった子と、15分待って2つもらった子を60年間追跡した調査した結果、60年間いろいろなのが優位だったのは、我慢していた子と有名で、自分をコントロールする力がある子は、いろいろな面で優れていることが分かった有名な研究があります。そこには2つ問題があります。一つはマシュマロが好きかどうか。私の園で、園でしかできないことだが、やってみた。すぐ食べる子と、待てる子がいたが、うちの場合はマーブルチョコだったが、試しにすぐに食べてしまう4歳と、すぐに食べてしまう3歳を一緒に部屋にした。そうしたら3歳がすぐに食べようとするが、それを4歳の子が止めていた。4歳の子も一人だと、食べていたが、3歳に食べちゃダメと言っていた。食べる真似をしたりしながら、最終的に食べなかったように、集団の力と、子一人とでは行動が違いますよね。園は子ども集団があるので、この集団を使わない手はないだろう。乳児保育は、単体の研究か母子の研究なんです。家庭の育児を、そのまま保育園に当てはめようと思っています。うちの園は、0歳児だけで21名います。1歳児は30名、1階の01歳児は51名います。それが家庭の中での時と、家とで同じ行動なんかしないですよ。家では、パンにジャムがついているのと、ついていないのを両方を中々しませんよ。指針を読んだり、研究を読むと、乳児保育は集団における保育の仕方が書いていないです。それを現場の役目として、提案しようということを考えた。

—これからの時代を見据えて—

それを私が、藤森メソッドを提案した一つです。子ども同士の関わりをどう作るか、その影響と効果。私が論文を書けたらいいが、子ども同士における影響と効果。子ども同士がいることで、どんな効果が生まれるかが一つ。家庭におけるもう一つ。園の保育と、家庭、大人と子ども関係は違うだろうと思っている。家庭の育児をあてはめたら、問題を起きてしまいます。複数の大人との在り方を考えたのが、チーム保育の考え方です。4つ代表して提案しているのが、人との関係がその中の二つ。一つが子ども同士の関わりをどう作っていくか、それがどんな影響を及ぼしているか。もう一つがチーム保育という、複数の保育者の関わり方があります。そこに特化して話をしていきます。なぜもう一度考えたかということ、時代の変化です。AI・グローバル化など、逆に言うと人間としてできることを見直そうということです。Society1.0は狩猟社会です、獲物を取っていく社会。2.0は農耕社会によって、社会という村が出来ます。3.0は工業化時代、より早く大量に。4.0は情報社会が現在です。次に来る未来が5.0。ビックデータや仮想空間など、あらゆる中で人間らしさを見直していこうということが、次の時代と言われています。その中で、人類の進化から、どういう生き物で、どういう特徴を持っていたかを見直しています。自動化されることも、人間し

かできないことにしていけないと、この前サッカーでもそうだが、審判もだんだんと AI に変わっていきます。人間の眼だけでは難しくなってきます。そういう時代に対して、新しい学びをしないといけない。事実を頭に入れても、検索したらすぐに情報が入ってきますので、それを必死に覚えても仕方がないです。これからは対話する能力（コミュニケーション能力）、他と協力する能力。実行機能は、人と人との関係によって出来ることです。この3つがコロナ時代に全てされてこなかったことです。もう一度 AI の時代に戻ってしまった。ということが起きてきているので、逆にひずみが起きて、いじめや不登校が増えているとか、ストレスが溜まってきています。人は本来、人とコミュニケーションをとること、協力すること。その中で、自分をコントロールすることが大事と言われています。グローバル化やインクルーシブは偏っていて、海外の人が入ってくるだけ、英語をしないといけないとか、インクルーシブだと、障がいの子も一緒というが、そうではなくて、10年くらい前に、ミュンヘンで行われたインクルージョンについて世界大会があって、参加したときに、障がいの子も一緒にするのは、インテグレーションという考え方です。インクルージョンはそこだけではなく、もっと広く、社会から除外されたり、社会から排他されたものを、社会の中に取り入れていこうという考え方。社会から除外されている人たち。例えば、不登校の子たち、白人黒人、難民、ジェンダーなど、社会から迫害された人たちをもう一度、一緒に取り入れていこうということが、インクルージョンということを書いていました。アメリカでは、黒人白人のインクルージョン。ヨーロッパの多くは難民移民のインクルージョン。障がいの子もそうですね。日本でも、障がい学級があるのはダメだと、インクルージョンではないと警告を受けています。ドイツは障がい、男女、年齢なんですね。年齢によって分けられるべきではない。何歳だからではなく、あなたは何かできるかの捉え方をしましょうと、私が提案する異年齢の考え方です。異年齢は、異年齢でやるのではなくて、年齢で子どもを区別しない。年齢によるインクルージョンです。それが一つの異年齢を取ることです。次世代として男女にきていますが、この次は、年齢ではなくてということです。あなたが何が得意か。特性に応じた保育ということです。そうでないと、はみ出す子が出て、それが結局インクルージョンじゃないわけです。除外されていく。しかし、それは年齢による判断があるからです。何歳は、これが出来ないという考え方を止めていこうということです。

—藤森メソッド 4 つの提案—

①子ども同士の関わり ②インクルージョン多様性から考える異年齢。 ③選択、子ども主体の参画。 ④チーム保育。この4つを提案しています。このうちの二つが、人と人との関わり。多様性やグローバル化をもっと広く考えないと、インクルージョンの考え方も、もっと広く考えないと単純に障がい児と一緒にしているので、インクルーシブ保育をしていますというのは、一部の考え方だけです。そうではなくて、すべての子の特性を見る考え方です。それから VUCA は予測不可能な時代ということで、想定したマニュアルを作るのではなくて、想定外のことが起きた時に、最善かの判断をするために、もっと基本のところ共通を持たないといけない。根本的なところで共通認識を持たないといけない。方法を提案しているわけではないです。そのためには、乳幼児期ということで EU 諸国は一つの国にしようとしたときに、各国の合意点を見つけ、教育に関して 46 項目決めたそうです。そのトップは、教育の最優先課題を乳幼児教育にするとしたのです。障がいの基本は、乳幼児保育で、教育は学校で始まるわけではないんです。これが全く日本は後進国だと思います。単純に預かればいいのか、思っていないですね。私が脳の感受性のグラフを紹介すると思うが、この間中国で見守る保育広げている園が、玄関先に大きく貼ってありましたね。保護者に、だからこの時期が大事なのだと訴えかけていた。正面にありました。ピークのところが、うちの園でやっている子が対象の子どもです、と言っていました。乳幼児は家庭でやることを代わりにやる場所ではありません。きちんと

した教育をするところです。これを小学校の先生たちが理解していないことが頭に來ますね。いかにも自分たちは教育で、あなたたちは預かっているだけでしょ、という態度に頭に來ますね。早く園が一つの考え方でやっているのだと団結したいくらいですね。その中で、自分の園がどうするかがあります。そういうような大事なことがあるが問題点があります。日本はなかなか変わらないのは、OECDのピサの学力調査の結果がなかなか高いんですよ。だから自身を持っているんですよ。読解力、数学、科学とか5, 6位で日本の教育は素晴らしいというが、5年生・中2が高いのは、短期的な教育を上げるもので、長期的にはぼろが出るんです。それが先日発表され、日本の競争力が最下位に下がりました。1990年は世界で一位でしたが、現在は34位。今、日本の若者を世界は誰も採用しません。学力が小5、中2で高いのに、社会に出たらこんなに下がるかです。それは教育が、短期的な知識を与える教育をし過ぎているからです。もうひとつ、ヘックマンの研究ではないが、乳幼児教育に力を入れていないということです。非認知能力は修学前、乳幼児教育によって培われるものです。これは本当にショックです。競争力が低下していますから、今は非認知能力をしようといっているが、ではそれをどう身に着けるかということです。(次号に続く)

本稿は、2022年12月13日に開催した「第56回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)